

---

# ちびんちゅ物語

みやこ 京一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ちびんちゅ物語

### 【Nコード】

N8635C

### 【作者名】

みやこ 京一

### 【あらすじ】

体長5センチほどの小さな宇宙人たちの奇天烈で破天荒な言動によって巻き起こされる爆笑な日常。いやおう無く巻き込まれることになった男性・中原カズヤにとっては迷惑極まりないのだが……。

## はじめに(前書き)

この作品の最重要事項は「勢い&テンポ」です。よって、時折文体が崩れることもあり、小説らしからぬ文体となることが予想されます。

その点をあらかじめ踏まえて、作品を読み進めてくださいな

## はじめに

本作品は北はエトロフ、南は沖ノ鳥島まで、寄せ集めてかき集めて総勢3名の（たったそれだけ！？）小さな小さなアホ宇宙人 通称ちっちゃい人 マニアに送った物語の大改訂版である。改定前のタイトルは『ちっちゃい人検証ファイル』で、某サイトにて『左京ゆかり』というペンネームを使って3年ほど前に発表した。ま、検証って程高尚な内容では有りませんでしたかね……。

このサイトにおいて作品を奇特にも……いえ、ありがたくも最後まで目を通していただいた読者の方々には彼らについておおよそのことが分かっていたただけであろう。

ただし、彼らのことを理解したところで、あなたの人生において何か得をするということはまず100%あり得ない。作者自身の全財産をかけてもいいほど「無駄だ」と断言する自信はある。……いや、かけるほどの財産もないがな（号泣）。

本作品に目を通すことで、あなたの貴重な時間を費やしたとしても、一切の責任はこちらには生じないものとする。

過ぎた時間を取り返すことはできない。それでも、読みたい人は項を進めていくがいい。

ああ、読むがいいさ！！（何で、こんなに偉そうな口調なの？）。

ちなみに「ちびんちゅ」とは二歳年下のいとこがネーミングしたもので、「海人」と書いて“うみんちゅ”って言うでしょ。だから“小人”と書いて“ちびんちゅ”っていうのはどうか？”という提案があったので、採用させてもらった。採用した際のアイデア料はトカゲの尻尾24匹分（採りたて）である。いとこは感激のあまり全身を震わせ、顔は硬直し、涙まで流していたなあ……。顔色が真っ青だったのがちょっと気になったけど。

しかし、そのいとこは大変つつしみ深く、けしてそのアイデア料を受け取るうとはしなかった。もう、遠慮することないのに。

それでは申し訳ないので、後日いとこ宅へ以前渡しそびれた分に追加して合計93匹分のトカゲの尻尾と、さらに感謝の意を込めて鮮度が落ちないように真空パック加工したアブラゼミ52匹を送ることに。

数日後、いとこから『絶縁状』が送られてきた。それについて首を傾げる今日この頃である。

## はじめに(後書き)

初めてのコメディ作品です。ネタ自体は随分と前から出来上がっており、いつか作品にしようと大事に温めて温めて、温めすぎてしまい、そこはかたなく腐敗臭が漂っておりますが、どうぞお気になさ  
らぬよう……。

読んで下さった方が、少しでも笑ってくださいることを願って努力してまいります。

さあ、いざ ちびんちゅワールド へ!!!

## 1【真夜中の訪問者】

最近極々一部の巷を騒がせている「ちっちゃい人」は、2000年秋にちっちゃい人星から地球にやってきた異星人である。彼らとの出逢いはある意味衝撃的だった。

十月某日深夜、俺こと中原カズヤ 二十八歳独身。職業バ―テンダー。ただいま花嫁さん絶賛受付中 が暮らすアパートの一室に奴等は突然現れた。どこから入ってきたのか気付かないほど、本当に突然だったのだ。

この日は秋だというのに寝苦しく、なかなか寝付けなかったので、布団の中でごろごろとしていたのだが この時、部屋は薄明かりが灯っており、仰向けの状態で目を閉じていた どうにかうとうとし始めた時、いきなり瞼に何かか押し当てられる感触があった。ぐりぐりと何度も。

!?

驚きのあまり動けない。

それはなにやらざらりとした感触だが、硬さはない。ざらざらした中にもスポンジのような微妙な弾力を感じた。

突然の出来事に頭が働かないでいる俺。

そこに頭の周りをうるつく気配がした。その気配は二つ。

うっわぁ!! なになに!!? …… はっ、もしかして怪奇現象? 金縛りや、奇妙な物音、怪しげな声ということは過去に何度となく体験したことはあったが、今回のように目に何かか押し当てられるといった体験は初めてだった。

しかも枕元に誰かいるっ?!

怖くて目が開けられない。

半分パニックになりかけた時、いきなり右の耳元で声が出た。

「こんにちは」

「は？いや、午前一時過ぎだが……。」

今度は左側から聞こえた。

「あ、今はこんばんはかな？」

どうして昼と夜の区別が付かないんだ？すぐに分からないのか？

ものすごいのきな声。こんな声の持ち主は脳みその代わりに梅干の種でも入っているに違いない。

この場にそぐわない明るい声が反って不気味で、いつそう恐怖心をあおる。

得体の知れない恐怖に俺の全身は硬直していたが、幸いなことに自由は利きそうなので、とりあえずはゆっくりと目を開けることを試みた。

……が、なぜか開けにくい。いつもの半分くらいしか開かない。眼球の周りに何かリング状の物が押し当てられているのが原因らしい。しかも両目。

「いったい俺の身に何が起きているのか？！」

とにかくどうにか上体を起こして立ち上がり、部屋の明かりを点け、うつすらと開く視界を頼りに部屋の隅にある姿見の前に向かう。

「なんで目が開かないんだ？呪いでもかけられているのか？！」

「恐る恐る自分の顔を映し出す。」

「……次の瞬間、俺は勢いよく嘔き出した。」

「ぶふおっつっ」

そこには言葉にならないほど間抜け顔な自分がいた。

なんとリング状のドーナツ二個を糸でつなげたメガネ（と言うのだろうか）をかけていたのだ。

この時以上に間抜けな顔はこの先一生見ることはないだろう。大阪の食い倒れ太郎が裸足で逃げ出すほどの、間抜けなメガネ顔。



深夜二時にこんな格好をする羽目になるとは誰が想像しただろうか……。おそらく全知全能の神ですらこんなハプニングは予想だにしていなかったはずだ。

鏡を見つめ、愕然と立ち尽くしていると、足元に気配を感じた。「何っ?」

すぐさま下を見ると、そこには体長五センチほどの影が二つある分かりやすく説明すると、布のような、布じゃないような、見たこともない白い生地で出来た全身　　やたら伸縮性がありそうな体だ　　、頭には二本の毛が申し訳なさそうに生えており、黒目の大きな人形のような物体。(……ちつとも分かりやすすくないじゃん)

顔立ちはとても可愛らしく、女性に大人気のキャラクター“りら　　つ　　ま”の耳を取った感じ。細かく言えば“こり　　つくま”。

つまりは人形型のクツキーを立体的にしたとも思ってたほしい。(投げやりな説明だ……。この説明で理解できた方、ブラボーです)「……何なの?」

謎の物体の二体は黙ったままじつとこちらを見上げている。手にはなぜかチュッパチャップスを持って。

自分の頭よりもでかい飴。どうやって食うんだ?

傍らに立つ物体があまり怖そうではないので、割と冷静になれた。不思議そうに眺めている俺と彼らの目が合った。

さっきの「こんにちは」とか言う声はこいつ等だったのか? 一見して間抜けな顔。こんな顔の奴等なら不可思議な言動はなんとなくうなずける。

互いに見合ったまま、微動だにしない。

しばしの間、俺たちに沈黙と緊張が走る。

どのくらいの時間が経ったことだろうか。

数回まばたきをする俺。

すると、奴等は失礼にもいきなり俺を指差し、腹を抱えて笑い出



どうやら奴等には骨格が存在しないらしく、ぐいぐい踏みつけても骨の折れる音はしない。ちょっと固めのスポンジを踏んでいるような感触だ。

「みよほううううう。やばい、ホントに出ちゃう。ごめんなさい。」

「ごめんなさいいっ」

「ぢゅらああああ、もう笑わないからあ。許してえ」

必死で謝る声でしたので、二、三度その場でジャンプをして思い切り踏みつけにした後　踏む度に「ぺりゅ」「ちぼっ」と言うわけの分からん言葉を吐いていた　仕方無しに足をどけてやった。

踏み続けたら何が出てくるのか興味があったが、まあいい。……今はな。

ふらふらと立ち上がる二体。

「はっ、ふっくらしたあ」

ふっくら??

「ひにゃあ、ぽっくりしたあ」

ぽっくり??

「……あ、間違えた。びっくりしたあ」

「そうそう、びっくりしたあ」

何をどう間違えたら“ふっくら”や“ぽっくり”と言つ言葉が出るのだろうか(汗)。

こいつらアホか？

……うん。間違いなくアホだろうな。

俺はこのふざけたドーナツメガネをむしり取り、ゴミ箱に激しく叩き込んだ後、洗面所に向かった。

やつらは俺の後ろをイナバウアーの体勢でちまちま歩いてついてくる。……気色悪い。

「待てえ〜」

「待て待てえ〜」

うつとうしいので軽く蹴散らしてやった。

「がふう」

「どふう」

変なうめき声だな、と思いつつも特に気に留めず歩き出した

早く顔を洗わないと砂糖がべとついて気分が悪い。

コリもせずに奴等について来る。

「待てえ〜」

「待て待てえ〜」

今度はアンディ・フグ氏の必殺技“脳天かかと落とし（通信教育で習得）”をお見舞いしてやった。

「ポツキー！」

「プリッツ！」

やはり訳の分からぬうめき声。（これ、うめき声？ただの商品名だよな？）

脚をどかすと、頭が胴体にめり込み少々……いや、かなりこっけいな形態と化していた。

まあいい。これで少しは大人しくしているだろう。

と、思った俺の判断は甘かった。

首をめり込ませたまま、ものすごい高速回転をしながら後を追ってきたのだ。

なぜ回る？

「待てえ〜」

「待て待てえ〜」

なんか精神的に疲れた……。

相手にするのも馬鹿馬鹿しいので、無視をして洗面台の前に立った。

お湯を溜め、石鹸を泡立てた後、ごしごしと顔をこする。。

「ぶふう」

ドーナツの表面にまぶされていた砂糖が思いのほか顔にこびりつ

いていたので、時間をかけて念入りにを洗う。

その間、奴等は俺の足元でなぞなぞを出し合っていた。  
ちなみに首は今だにめり込んでいる。

俺の右側に立っている物体がまず問題を出す。

「第一問。チヨコはチヨコでも食べられないチヨコは？制限時間は5秒28だぞ」

時間、細かいよ。

「えっと、えっとお……。」

左側に立つ物体が泣きそうな顔で必死に考えをめぐらせる。

「残り2秒96」

だから細かいっての。

「ふん。こんなの簡単だね」

今、必死で考えてましたよね？

「答えは島倉チヨコだね」

チヨコじゃなくて千代子だ。第一、お前ら島倉千代子氏を知っているのか？

「うう、正解」

右側ががっくり肩を落とした。

正解なのっ？！

「えっへん」

左側が得意げに胸を張る。なぞなぞ程度でそんなに威張らんでも……。

続いて左側による出題。

「今度は俺ね。第1258問」

間の1256問はいづこへ？

「プニはデラでも、どべってるゴモって何だ？」

さて、何だろっ……。

「わかったあ。余裕ね」

早っ、分かったの?!俺なんて答えどころか問題の意味すら分かんねえ。右側、すげえな。

「相対性理論でしょ」

「いったいどの辺りが相対性理論？」

「……くそ。正解」

床を拳で叩いてくやしがる左。

本当に？本当にそれが正解なの？

「簡単だったね。問題を聞いた瞬間にゴリツときたよ」

右側の物体が嬉しそうにVサインを出す。

それを言うなら“ピンときた”だろう。……指二本立って

るから、VサインじゃなくてWサインだな、それ。

「なんだか訳の分からない物体たちが、言葉の認識違いも甚だしいアホだと言うことだけは確認できた。」

## 1【真夜中の訪問者（後書き）】

念願だったコメディ作品を思い切って投稿してみました。ものすごくドキドキです。未熟者真っ盛りで、小説書きの風上にも置けない奴なので風下でよろしくお願いします。

## 2】 奴等とチュッパチャップス

顔を洗ってさっぱりした俺はリビングのソファに腰を下ろした。  
「ああゝあ」

両腕大きく上げ、背伸びをする。

眠気はとつくにどこかへ飛んでいってしまった。この  
アホ共のおかげで。

アホ物体たちは俺の目の前にある背の低いテーブルの上に座っている。しかも正座で、傍らにはチュッパチャップスを置いて。

「それにしても、こいつら何なんだ？」

地球外生命体だとは思うが、風貌からは恐怖は感じない。それなりに愛嬌のある顔をしている。

「めつたにない経験だ。せつかくだからコミュニケーションでもとってみるか。幸い言葉は通じるみたいだし」

よし、と言って俺は膝を叩き、奴等に向き合った。

「お前の名前は？」

向かって右側に尋ねる。

「ちっちゃい人だよ」

左側にも尋ねる。

「お前は？」

「ちっちゃい人だよ」

同じ答えが返ってきた。

これでは区別が付かない。見た目はまるつきり同じに出来ているのだ。

どうしたものか……。そもそも“ちっちゃい人”ってのが名前なのだろうか？

思索しているところに、物体たちが話しかけてきた。

「ねえ、これ食べていい？」

右側がチュッパチャップスを掲げる。



「ねえ、これ食べていい？」

左側もチュッパチャップスを掲げる。

どうせ同じ事を聞いてくるなら、どちらかが話しかけてくれればいいのに。

「あ？どうぞ」

許可を出すと、表面の包装を激しく引きちぎり、びりびりに破けた包装はその辺に投げ捨てた　　後でまた蹴飛ばしておくか。

飴が完全にむき出しになると、奴等がすくつと立ち上がる。

なにをするんだらうかと、少々不安気に見つめる俺をよそにご機嫌な奴等。

「これから“チュッパチャップス食べようねソング”を歌います」

と、右側。

「ます」

と、左側。

時折、言葉を省略する所を見ると左は若干面倒くさがり屋な性格だ。しかし「ます」だけは略しすぎだろう。せめて「歌います」ぐらい言わないと通じないと思う。

どうやら飴をマイク代わりに歌うようだ。が、飴がでかすぎて奴等の顔が見えてない。

そんな事は一向に気にする様子も無く、そろって歌いだした

まあ、好きにしる。

大きく息を吸って、身体を左右に揺らしてリズムを取る。

「飴　飴　　ぺるぺる　　母さんが〜」

聞こえて来たのは『雨降り』の替え歌である。

「蛇の目に　整形　気持ちわるう〜」

何の必要があつてそんな整形をつ???

俺の顔が引きつる。

「ペッコ　ペッコ　　チャップ　チャップ　　ランランラン」

歌に合わせ、その場でスキップをする二体。

『気持ち悪い』と言った割には随分と楽し気だな。

「……きゃあああ！お母さん、もぐらの丸飲みはやめてええ！！」  
ひいひいひいっ、なんだそのセリフはっ？！そんなものを  
飲むな、俺からも頼む！！

俺の顔がますます引きつった。

一番を歌い終え、満足気にぺこりと頭を下げる二体。

「続きまして二番を歌います」

「す

だから、左は略し過ぎだつての。

先程同様身体でリズムを取るが、左右に揺れているだけで歌い出す  
す気配が無い。

「……」

「……」

「……」

何故か沈黙の二体。若干あせっている様子。

ん？何でこいつ等無言なんだ？

「おい、歌わないのか？」

全然歌わない奴等に俺は尋ねた。

すると予想通りというかなんと言つか、彼らしい答えが返ってきた。

「……二番は考えてませんでした」

「た

アホらしい。だったら二番を歌うなんて言うなよ。

俺は脱力しきってうなだれた。

歌も終わったことだし、ようやく舐め始めるのかと思いきや、お  
もむろに正座をする二体。

まだ何かするらしい。

「では、次にお食事前のご挨拶に移らさせていただきます」

「……」

左はもはや無言。面倒くさがりすぎである。

それにしても、ただかチュッパチャップスを食べるために、こんなに壮大な挨拶が必要なのだろうか？疑問渦巻く奴等の習慣である。

「天に召します我らが神よ」

右側が神妙な顔で告げる。

左側はただうなずいている。

お前らの神もやはりアホなのだろう。俺が断言してやってもいい。

奴等が両手を高々と挙げる。

右手に持つ飴の重みゆえ、身体のふらつく二体。が、どうにか踏ん張り、セリフを続ける。

「チュッパチャップスが、なぜゆえに“チュッパチャップス”と言うのか、あなたはご存知だろうか」

まず、知らんだろうな。

あまりのアホらしさに思わず俺は失笑を洩らす。

「それはっ！……チュッパチャップス自身にお尋ねください」

飴に尋ねたところで、答えは返ってこねえし。しかも、商品名きちんと言えてねえし。

ここまで言っていると、奴等の身体が小刻みに震えて出した。

持ち上げた飴の重さはかなり厳しいらしく、額に汗が流れ始めている。

二体が顔を見合わせる。

小さな声で「もう下ろしちゃうおっか？予定に無かったことだし」とぼそぼそと呟く。

だったら始めからしなければ良いのに。

本当に余計なことが満載だ。

頷き合った後、素知らぬ顔で奴等は飴を下ろした。

まったく、自分の力加減ぐらいは把握しておいてほしいものであ

る。

そしてお言葉はまだ続く。

「神よっ！！万能なる貧乏神よっ！！！」

ガクツとソファーからずり落ちそうになる俺。

お前らの崇拜する神って貧乏神？！……万能だったら貧乏じゃないんじゃないの？

この世界には日本人が予想もしないような存在を神と崇める風習を持つ人種もいるが、貧乏神を崇めるのは始めて聞いた。宇宙人の文化は我々の想像が及ばないということだろうか。

奴等が飴を持っていないほうの手をピシッと挙げる。

「我々はスポーツマンシップに乗っ取られることをここに宣言します！」

乗っ取られたらまずいと思うが？もう、食事の挨拶とは関係ない展開になってるよ……。

あきれ返る俺とは対照的に、奴等はますます熱のこもったお言葉を進める。

「いざ、尋常に勝負！！！」

飴を前方に勢いよく繰り出す。

俺と戦うつもり……？

「いざ、尋常に勝負！！！」

二回言う意味はあるのか？

ここで初めて左側も口を開いた。

「いざ、珍妙に恐怖！！！」

それ、どんな状況だよ。右のセリフと微妙に発音似てるけど、意味不明……。

「では。手は洗ってないけど洗ったことにして、いただきます」

ああ、そうですか。お前らだったらどんな雑菌を口にしても死なないだろうよ。

こうして意味不明な挨拶は締めくくられた。

無駄に馬鹿馬鹿しい挨拶も終わり、ようやく食べ始めるようだ。ここで俺が気になっていいることがある。先程に述べたように、奴等の頭よりも飴のほうがでかい。適当に小さくなるまで表面を舌で舐め溶かすのだろうか。興味津々で、奴等の行動を見守る。

しかし俺の予想はあっけなくはずれた。

奴等は巨大な飴の塊を一気に口に突っ込んだのだ。

「ふごっ」

「ふごっ」

わずかにある隙間から奇妙な声が漏れる。

「うおっ！顔が伸びたっ！」

全身がゴムのような素材で構成されているのだろう。頬だけが異常に伸びている。まるでハムスターの頬袋のようだ。

それにしても、飴で膨らんだ頬は当然頭よりもでかくなり、頬の余った面積に目鼻が付いている感じ。見ていて気持ち悪い。食べるのを止めさせるか。

「悪いんだけどさ……」

「ひゃひ？」

「ひゃひ？」

奴等が俺のことを見上げる。

おそらく『何？』と言っているのだろう。飴のせいでうまくしゃべれない。

「飴を舐めるの止めてくれるかな？」

まともに見たくないの、視線を右に逸らす。

すると奴等はご丁寧にも俺の視線の先に移動しやがったしなくて良いっての。

「ひゃんで？」

「ひゃんで？」

首をかしげている。

今度は『何で?』と言っているのだろうか。

「ええと、まあ、ちよつとお前たちと話をしてみたいからさ」  
俺の言い訳がましい申し出に、左右に首を振る二体。

「ひやって、ふあめほひひいから、じゅっとひやめたいの」

「ひやって、ふあめほひひいから、じゅっとひやめたいの」

察するに『だって、飴おいしいからずっと舐めたいの』だ

と言うか、こんな分かりづらい言葉を解読できる俺ってすごくないか?

少しだけ嬉しくなった俺。

「ひゅっぱひゅっぱしゅ、しゃいほー」

「ひゅっぱひゅっぱしゅ、しゃいほー」

ピョンピョン飛び跳ねて、実に嬉しそうである。

『チュッパチャップス、サイコー』か。うん、分かる、分

かる。

が、俺が分かったのはここまでだった。

「うはべにゃく、りよごとつとた」

「うはべにゃく、りよごとつとた」

すごい速さで俺には意味が無いように思われる言葉を喋り出し、  
なんだかいきなり意味が分からなくなった。

「しょばばば、ぼんだ、ぼりりの」

「しょばばば、ぼんだ、ぼりりの」

ぜんぜん、分からねえ。

飴を啜えながら良くこんなにも喋れるものだと、半ば感心している俺。

「こなでれが、ごごへのここには、じっくりにこんだちわわがおいしい」

「びよだわつでとつぷち、ぷるるち、にかげつつけこんだみけねこはぜっぴん」

はあっ?後半は『じっくり煮込んだチワワが美味しい』と

『二ヶ月漬けたんだ三毛猫は絶品』だよな……?」

「げんじゃじゃの、ぼちぼちりゃ、こんちくしょうほけんりょうぞうがく」

「きよへへに、ぎゃほほる、こっかいぎじどうばくは」

『こんちくしょう保険料増額』？『国会議事堂爆破』？ちよつとしたテロ予告じゃねえか！？

まさかとは思いつつも、俺は笑えないでいる。

「ちによく、きゅぼぼら、ふあふえふあ、かみはおまえたちにごういうだろう」

「へにゆく、れれれの、ぎゃぎゃめと、おふせはひとくちはちまんえんより」

『神はお前達にごう言っだろう』？『お布施は一口八万円より』？なんだか悪徳新興宗教みたいになってる……。

しかし、奴等のふざけたセリフはここまでだった。

「ぐぬね、ぐぬねば、にやにやにやにや、ぐっ……」

「ほっしょく、めっしょく、こここれ、ぐっ……」

突然、奴等の顔が苦痛にゆがむ。

「どうしたんだ？」

心配してやる義理はまったくないが、一応声をかけてやる。

「ひたきやんだあ」

「ひたきやんだあ」

『舌嚙んだ』？

見れば涙目になっている二体。飴をしゃぶりながら、こんだけしやべっていれば舌もかむだろうさ。

「ううう、いひゃい」

「ううう、いひゃい」

『痛い』のか。どうしようもないアホ共だ……。

## 2【奴等とチュッパチャップス（後書き）】

小説として投稿している以上、小説としての文体を守ろうと努力中。極力文体を乱さずに、より分かりやすく、より面白く書けるように頑張ります（・・）

1話分のお話の長さはこの程度でも大丈夫でしょうか？毎回この位の文章量になることと思います。「長すぎて見づらい」というご意見のある方はメッセージにてお知らせください。可能な範囲で対処します。



### 3【ミラクルフェイス】

長いこと口に入れていたおかげで飴は幾分小さくなったが、まだ話しづらそうだ。それに顔の気持ち悪さは相変わらず。

「そろそろ飴、舐めるのやめないか？」

再び俺が申し出る。

「ひやんで？」

「ひやんで？」

不思議そうに首を傾げて尋ねる二体。

「何でつて……。えと、だ、だから、さっきも言ったようにお前達と話したいからさあ」

じいっと俺のことを見る四つの瞳。

そして一言。

「やだ！」

「やだ！」

即答。しかもはつきりと。

なんだ、しゃべれるじゃねえか！

腹が立ったが、ソファーに座っている俺は蹴飛ばすことが出来ないで、とりあえず奴等の頭をそれぞれわしづかみにしてやる。自慢じゃないが同年代の男性に比べ、握力はかなりあるほうだ。

「いたたたたたたつ」

「いたたたたたたつ」

手の中から悲鳴が聞こえる。

かまわずぎゅっ、ぎゅっと更に力を込める。

「飴食べるのやめるからあ」

「だから頭つぶさないでえ」

足をばたばたさせて、わめいている。

本気で泣いているようなので、仕方なく止めてやろうと思った。が、最後に思い切りグツと一握り。



台所で適当な皿を見つけて戻ってくると、皿を差し出した。

「これに乗っけとけ」

コトリ、とテーブルに置く。その皿に二つの飴が並ぶ。

「ありがとう、おじさん」

「ありがとう、おじさん」

につこり微笑みつつ礼を述べる二体。

俺のこめかみに青筋が浮かぶ。

男だから女性ほど年齢を気にはしていないけれど、それでも二度も“おじさん”と言われると多少傷つく。

腹いせに手近にあった卓上用ミニクリーナで二匹まとめて奴等の口を吸い込んでやった　もちろん吸い込み強度は『強』で。

「あばばばばばっ」

「うぶぶぶぶぶぶっ」

両手をばたばた振り回して苦しんでいる。

「んー、んーっ!」

「むー、むーっ!ムーミン!」

左の奴は若干余裕があるようだ。

吸い込み強度を『最強』に合わせる。

「んんんんんっ!!!!!!!」

「むむむむむっ!!!!!!!」

今まで以上手足をばたつかせる。

必死であがく様がちよつと可哀そうになってきたので、スイッチを切って吸い込み口をはずすと、案の定口元がみよおんと伸びびいて、鶴のくちばしのようだった。

「ぶっ」

頭がつるっばげの鶴……。 (注: けして駄洒落ではありません)

「ひどいよお」

「ひどいよお」

涙を浮かべてこちらを恨めしそうに睨んでくるが、その顔ではま

るで凄みがなく、おかしいだけだ。

「お前らがム力つくこと言うからだ」

クリーナーをソファの脇に置きながら、俺は言う。

「そんなあ」

「そんなあ」

しよげ返る二体。

「初対面の人間にいきなり“おじさん”は失礼だろう。気持ち悪いから、早くその顔直せ」

「自分でやっておいたくせにい」

「気持ち悪いってひどいよお」

確かに、奴等の言い分はもつともだ。

が、元はといえばこいつ等の言動が原因だ。俺は悪くない。

ひどい、ひどいと連発するので、俺はちらりとクリーナーに目をやる。

ビクツと肩を震わせる二体。

「さ、さてと」

「直そうかなあ」

とたんに大人しくなる

何か悪さをしたときはこれでおし

おきをすることにしよう。

視線を戻すと、奴等はお互いの顔の形を整えてあっていた。

俺は黙って様子を見守る。

奴等はゆがんだ輪郭を整え、飛びだした唇を元に戻している。

黙々と作業を続け、ようやく元の顔に治りかけてきた。

しかしここから、整形作業は変な方向へと爆走する。

「引っ張るなよお」

「お前こそお」

なにやら雲行きがおかしい。喧嘩にならなければいいが……。と言っ俺の心配をよそに、取っ組み合いが始まってしまった。

「この、下手くそお。俺はもつと男前だぞお」

「お前が下手なんだよお。美的センスなさすぎい」

俺から見ればどちらも同じような出来映えだ。

それでも、奴等には違つて見えるらしく、テーブルの上で、ドタン、バタンと大喧嘩。

「こら、やめろっ」

白熱しているこいつ等は俺の言葉が聞こえてない。

「ばあか、ばあか」

「馬鹿つていう方が馬鹿なんですっ」

低レベルだな。

こんなちびっ子共が暴れたところで大した被害はないだろうと思  
い、気が済むまでやらせておくことにした。しかし、この判断は間  
違つていたことにすぐ気付く。

「中原カズヤの母さん、出べそっ！」

「中原カズヤの父さん、ビールツ腹！」

なぜ、俺の親が出てくる？！

喧嘩はエスカレートする一方で、お互いの身体を掴んだり引つ張  
ったり。それに伴い、暴言もおかしな方向にエスカレートしてゆく。  
「中原カズヤの母さんなんて、“カルボナーラ”を言い間違えて“  
ボラギノール”って言ったくせに！！」

「中原カズヤの父さんなんて、“毎度どうも”と言われたのを“  
ナイスファイト”と聞き間違えて、店員にガッツポーズを返した  
くせに！！」

「俺の親は今、関係ないだろうっ！……というより、どうしてそれ  
をお前達が知っているんだ？！」

物が壊れることはなかったが、俺の精神的被害がこれ以上酷くな  
らないうちに 悔しいことに、こいつらが言っていたことは  
事実なのである クリーナーに手を伸ばして、スイッチを入  
れた。

ブーンと、鈍いモーター音がする。

「はっ」

「はっ」

手が止まり、恐々とこちらに顔を向ける奴等の顔や身体の至る所が、たるみ、伸び、それはそれはおかしなことになっていた。

「いい加減にしないと、また吸い込むぞ」

クリーナーの吸い込み口を奴等に向けて、低い声で脅しをかける。先程の吸い込みがよほど応えたのか、二体はぶんぶん顔を左右に振った。

「だったら大人しく直してろ」

「はい」

「はい」

横目でちらちらとクリーナーを伺いながら、作業に戻る二体。

「まったく、やれやれだな」

今度はまともになっているので、クリーナーのスイッチを切って俺はお茶を入れに台所へ行った。もちろん自分の分だけだ。

俺はガスコンロの前でお湯が沸くのを待っていると、隣の部屋からは何やら話し声が聞こえてきた。

「鼻はもう少し高くしたほうがいいんじゃない？」

「目の大きさはこの位かなあ」

どうやらちゃんとやっているようである。

「よしよし。……さてと、紅茶にするか」

食器棚の一番上段からティーバックを取り出しているところへ、また隣の部屋から話し声が。

「あ、黒いマジック発見！」

「いいね、これ使おう。りりしい眉毛って憧れだったんだあ」

使う分にはかまわないが、おかしなことにならないかればいいけど。

少々不安に思いつつ、俺は紅茶が出来上がるのを静かに待っていた。

「どうだ？作業は終わったか？」

ソファーに戻ってきた俺は、危うくマグカップを落としそうになった。

テーブルに並ぶ二体の顔があまりに劇画調だったのだ。元の顔は微塵も感じさせない有様。

想像してほしい。北の拳のケンシウの顔がりらっまの顔面に張り付いているのを！

ファンシーなショップに並びつくま商品の数々。そのすべてがケシロウ……。

『可愛くない』をマツハで通り過ぎて、もはやショップは肝だめし会場に様変わり。母親の顔はその不気味な様子に引きつり、子供は恐ろしさのあまり泣き出す。そしてOLは言葉を失い、女子高生達は「これ、けっこう可愛くない？」とまとめ買い。(買うのか、それ？)

「この顔どう？」

「結構苦労したんだよ」

「ご機嫌な二体。ニコニコと嬉しそうだ。」

ケン　ロウの顔で微笑まれても、更に不気味さを増すだけで、俺の手の平や首元に怪しい汗がにじむ。

「……だめです。直しなさい」

「ええ、なんでえ」

「気に入ってるのにい」

ぷうっと頬を膨らませてすねる二体。

すねたケンシウの表情は、ただ気持ち悪いとしか言いようがない。その顔で「ぶんぶん」とか言っな。

俺はそつとマグカップをテーブルに置き、無言でクリーナーのスイッチを入れた。

ビクッとおびえる奴等。

「わ、わかったからあ」

「元の顔に直すからあ」

慌てて顔を拭き、お互いの顔をこねくり回して、よじぢやくもとの顔に戻った。



#### 4【異星人のお味は・・・？】

どっと疲れが増した俺はソファーに深く腰をかけ、紅茶をすする。いつの間にもやら外はうつすらと白み始め、まもなく日の出が訪れるだろう。

どうせ今日、明日は仕事休みだ。後でゆっくり二度寝でもするか。

今更もつ眠る気もしないので、ゆっくりと紅茶を口に含む。

「ああ。いいなあ、自分だけ飲んでる」

「ねえ、ちっちゃい人たちのお茶はあ？」

両手を振り上げて講義してくるアホ共。

「うるさい！」

まったく、誰のせいでこんなに疲労困憊していると思っ  
ているんだ。

俺が一喝すると、口を尖らせて大人しくなった。

「ちえっ」

「ちえっ」

こうして黙っている分には大変愛らしくて害はないのだが、いかんせん言動が奇天烈すぎて、精神的に大ダメージを受ける。

「ああ、そうだ」

マグカップをテーブルに置き、俺は尋ねた。

「お前達の名前ってどっちも“ちっちゃい人”って言うんだろ？」

「そうだよお」

「よく覚えてたねえ」

左は面倒くさがりな上に、ちょっと皮肉屋らしい。

一瞬ムカツと来たが、クリーナーを出すほどでもなかったの  
ので、取りあえず耐えた。

それにしても名前が『ちっちゃい人』と言うのはなんだか奇妙だ。火星人とか、地球人というのと同じくくりで、名前ではないと思うのだが……。

「で、やっぱりお前達は異星人なの？」

それ以外には考えられない。

こんな宇宙人がいるとはな 見た目がどうのこうのではな

く、おつむの造りがあまりにお粗末だということに驚きだ。

「あっ」

こいつ等のほのぼのとした外見と、アホ三昧な言動のせいで俺はすっかり忘れていたが、本当に宇宙人だとしたら大変なことだよな！？

こういう時って何処に連絡したらいいんだ？NASAか？……いや、一般人の俺が連絡を取れる機関じゃないな。

なら、警察？……これもだめだ。なんて説明したらいいのか分からない。ありのままを述べたとしても、おそらく俺の方が“危険人物”として連行されそうだ。

それならTV局はどうだ？！世紀の大スクープとして大金を稼げるかもしれない……ああ、やっぱりだめだ。TVの前にこいつ等を出したら我が家の恥を暴露しかねない。全国ネットでべらべら話されたら、中原家は今後生き恥をさらす羽目になる。それだけは阻止せねば！

「……そうなると取りあえずはここで面倒見るしかないのかあ」

先が思いやられ、ますますがつくりと肩を落とす俺に呼びかける

アホ共。

「ねえねえ」

「異星人て何？」

奴等が質問してきた。

「え？異星人知らないのか？」

二体が黙ってうなずく。

「だって、まだ食べたことないから」

「何処に行けば食べられるの？」

真剣に聞いてくる。本当に分かってないらしい。

「いや、異星人て言うのはな……」

俺はふとひらめいた。

よし、憂さ晴らしでもさせてもらうか。

「……食べさせてやるうか？」

にやり、と意地悪く俺はほくそ笑む。

「ほんとあ？」

「食べさせてくれるのあ？」

「ああ、今すぐな。ちょうど手に入ったんだ。お前たちラッキーだな」

俺の脳裏など読めるはずもないアホ共が嬉しそうにはしゃぐ。

「やったあ、やったあ。異星人、食べちゃうぞあ。ついでに床板もはがしちゃうぞあ」

何のついでだ？

「ばんざあ。こっちははがした床板食べちゃうぞあ」

やめなさい。

よほど嬉しいのか、はしゃぎすぎて意味不明。

「嬉しいなあ。こつそりアメリカ大使館に時限爆弾仕掛けた甲斐があつたよ」

「嬉しいねえ。中国大使館は今頃火の海だね」

……ん？今、さりげなく物騒なこと言っただけか？

面倒に巻き込まれることを恐れ、俺は今の奴等のセリフを聞かなかったことにした。

「落ち着けて。ほら、お互い向き合って座れ」

「向きあつてえ？」

「なんでえ？」

「そつしないと食べられないからだ」

早くしろ、と手で指示をする。

「ふうん」

「そうなんだあ」

俺の言葉に従って、大人しく向き合って座る。

「こんな不細工な顔なんて見たくないなあ」

「俺だつてごめんだよあ」

まったく同じ顔をしているくせに何を言っているのやら。

「はいはい、どっちも男前。じゃあ、まず目を閉じろ」

「うん」

「うん」

素直に目を閉じるアホ共。

「いいか。異星人てのは活きがいいからすぐに逃げてしまつんだ。

口の中に入ったと思つたら、急いで噛み砕け。いいな？」

「了解！」

「了解！」

びしつと敬礼している。

これから何が起こるのか微塵も気付いていない。……哀れな奴等だ。

「ようし。俺が食べさせてやるから、大きく口を開ける」

「はあい」

「はあい」

察しのいい読者の方はすでにお気づきのことだろう。

「さあ、いくぞ」

俺はそれぞれの右手をつまみ上げ、何も知らずに大口を開けて待っているお互いの口に突っ込んだ。

「一気に噛めっ……！」

ガブツ！！

ガブツ！！

「……」

「……」

「いったああああい!!!!!!」

「いったああああい!!!!!!」

両目に大粒の涙を浮かべて痛がっている。

「どうだ？異星人の味は？」

これで少しはすつきりした。

ニヤニヤする俺。

「異星人なんて食べないよお」

「今のはちっちゃい人だよお」

お前達自身が異星人なんだが……。

「はやくく」

「食べさせてくれるって言ったでしょ」

今、食べさせたじゃないか。

地団駄踏みながら猛抗議。

「この人はうそつきだあ。うそつきは売れない落語家の始まりだぞ  
お」

「違うよお。それを言うなら太らない関取の始まりだろお」

どちらもハズレです。

「あのなあ、この場合の異星人て言うのは地球人ではない人の事を  
指すんだよ。つまり」

「つまり？」

「つまり？」

真剣に俺の話の話を聞いている。

「お前達のことだ」

俺はビシッと奴等を指差す。

「ええつ~~~~~!!!!!!」

「ええつ~~~~~!!!!!!」

黒目を大きく開いて驚くアホ共。

「お前達は何処の星から来た？」

「ちっちゃい人星」

そのまんまの惑星名か……。なんのひねりもないな。

「だから、お前達は地球人じゃない。よって異星人なんだ」

説明してやった俺にまさかの反応が返ってくる。

「うん、知ってた」

「始めから分かった」

ねえ、とうなずき合うアホ共。

「はあ？じゃあ、なんで異星人のことを知らないって言ったんだ？  
今までのことはなんだったんだ？

「ん？なんとなく」

「いい暇つぶしになるかと思って」

楽しげにVサインなんぞしてきやがる  
憂さ晴らしどころ

か、ストレスがマックスに。

その瞬間、俺の中で何かがぶちきれ音が出た。

その後3時間ほど卓上用クリーナーが作動していたことは言うまでもない。

## 5【レッツ・リンボー】

時刻は午前7時。

世の中が動き始める朝。

一日の始まりはたいいてい爽やかなものだ。と相場は決まっているが、今朝の俺はすでに疲れきっていた。

「なんか無駄な時間を過ごしたただけだったな……」

ソファーにぐったりともたれかかり、立ち上がる気力すらない。

それもこれも、目の前のテーブルの上で楽しげにリンボーダンス（実際にバーはない）をしているアホ共のせいだった。

「今流行の“エア”ものね」

「流行には乗っておかないとね」

くぐるバーもないのに、リンボーダンスの意味はあるのか

……？

俺には面白さがまるで分からない。

このところ、巷では“エアギター”がメディアに取り上げられて割と知名度を増してきたが、何でもかんでも“エア”とつけければいいというものではない。

これでは単に海老反りして歩き回っているだけである。“エア・リンボーダンス”、まるで意味なし。

「そつえば、こいつ等の名前の話だったよな。だいぶ脱線してしまった」

髪をかき上げながら、俺はさっきの話を続きを思い出した。

「おい、お前」

こちらに振り向く二体。……海老反りのままこつちを向くな。

「違いますう」

「お前って名前じゃありません」

ぷいっと横を向き、再びリンボーダンスを興じる。

「今度はバーの高さを3、5センチにして挑戦ね」  
まず始めに右側がチャレンジする。

「よおし」

どうせバーなんて存在していないのだ。落ちようがないから高さなんて設定する必要ないであろう。

変なところで細かい奴等だ。

「よっ。はっ。ちよつと難しいなあ」

仮想バーのある辺りで左が応援している。

「がんばれえ。気をつけないとおへそが当たるぞお」

「どっだけ海老反り？」

極小宇宙人の奴等にとつてもこの高さは結構厳しいらしい。

「うっ、無理かもお」

無理なものか。

「あつ、当たつちゃったあ。バーが落ちるうー!!」

右がこう言った瞬間のことである。

左が胸いっぱい息を吸い込み、大きな声で叫んだ。

「どっかああああああんっ!!!!!!!!!!!!!!」

耳をつんざく様な爆音がこの部屋に轟く。あまりの音に窓ガラスがびりびりと振動し、壁にかけておいた絵画が落ち、俺が飲んでいた紅茶のマグカップが真つ二つに割れた。

「な、な、なに？」

突然の轟音に頭がクラクラし、耳の奥がジンジンと痛み、恥ずかしながら腰が抜けてしまった。

すると玄関のチャイムがけたたましく鳴り出した。

ピンポンッ、ピンポンッ、ピンポンッ、ピンポンッ、ピンポンッ

!!!!!!

「中原さん！中原さんっ！」

隣の部屋に住んでいるOLの山本優子さんの声だ。

同時にドンドンと激しくドアを叩く音も聞こえる。

「おい、いったい何があったんだっ!? だいじょうぶか？」



この声は上の階に住む単身赴任中の浜田雄作さん。  
ざわついている感じからすると、とうやらドアの外ではこの二人  
の他にも人が集まっているらしい。

「あっ……。はい、今開けます」  
フラフラする頭を支えて、壁を伝いながらやっとのことで玄関に  
たどり着く。

恐る恐るドアを開けると、そこには六室あるこのアパートの住人  
のすべてに加えて、半径三十メートル以内に住む近隣住人が押しか  
けていた。ざっと二十人近くはいるだろうか。

「えっ？」

あ然とするしかない俺

この人たち、なに？

「ねえ、何があったの？」

山本さんが家の中を遠慮しがちに覗き込む。

「な、何って……？」

目をぱちくりする俺。自分でも何が起きたか分からない。

「朝っぱらから大きな爆発音がしたから、みんな慌てて様子を見に  
来たんだよ！」

浜田さんが心配そうな顔をしている。

「え……。いや、その……」

爆発音？……。それって、もしや？

間違いない。左側のアホが出した声だ。

「ねえ、家の中大丈夫なの？ 中原さん怪我は？」

「いえ、怪我は特に……」

俺はかぶりを振る。

ただの大声だ。被害はない……。あ、マグカップ割れてたな。あれ、  
お気に入りだったのに（泣）

「ガスにでも引火したのか？……その割には焦げ臭くねえなあ」

「物が吹き飛んだ様子もないし」

「そうねえ。家の中、きれいよね」

ドア付近の野次馬の人たちが口々に言っている。

焦げてもないし、くさいはずもない。ましてや物が飛び散ったはずもない。ただの大声だから。

「あんな大きな音がするなんて普通じゃねえよな。いったいどうしたって言うんだ？」

代表して浜田さんが俺に詰め寄る。

「えと……、それは……」

なんと言ったらいいのやら。

みんなの視線を一身に浴びる。

俺の額に脂汗がにじんできた。

「その……」

単なる物音であれば大した問題ではないが、あれは爆発音だ。笑ってごまかすことなんて出来ない。

みんなの不振そうな視線が痛い　　違います！断じて爆破実験とかしてませんからあつ！！

「あれは……、あれは……。そう、目覚まし時計の音なんですっ！　　すいませんでしたっ」

深々と俺は頭を下げる。

「はあっ？目覚まし時計？！」

その場にいた誰もが目を丸くする。

本当は目覚ましなんかではなく、うちにいるアホ共のせいなのだ　　が、本当のことは言えないし、『この宇宙人たちの仕業です』と言ったところで誰も信じてはくれないだろう。

それにこいつ等を人前にさらして、大騒ぎになったら更に面倒なことになる。

みんながパニックになるのも困るけど、それ以上にアホ共がまたしてもうちの恥をさらすような言動をしたら、俺は即刻このアパートを出て行かざるをえない　　我が親ながら、彼らは生きるお笑い伝説なのだ。

ちよつと苦しい言い訳だとは我ながら思うのだが、なんとしても　　真実を隠さねば　　俺のためにも。

もちろん、奴等のためだとはチリほども思っではない。

「はい、そうです。俺、目覚めが悪いから、すっごく強力な目覚ましを買ったんです。音量の設定を間違えて最大ボリュームにしてしまったみたいで……。ご迷惑かけてすいませんでしたっ」

みんなはあきれた顔。

そうだよなあ。こんなばかげた言い訳……。

でも、俺は真剣に頭を下げる。

「……まあ、何事もなかったって言うんなら、いいけどよ。これからは、音量の設定は間違えんなよ」

浜田さんがその場を収めてくれた。

怪訝な顔をしながらも一応俺の言い訳を信じてくれたらしく、みんながそれぞれに家へと戻ってゆく。

「はい、本当にごめんなさい。皆さんにもご迷惑をかけてすいませんでした」

ぺこぺこ何度も頭を下げ、謝罪の言葉を繰り返す。

俺、何やってんだ？

ようやく誰もいなくなり、力なくドアを閉める。

「はああ。まったく、もう……」

その場にずるずると座り込んだ。

「みんな朝早くから暇ねえ」

「いいねえ、暇な人たちはあ」

いつの間にやら俺のそばにやって来ていたアホ共。

誰のせいだと思ってるんだ。

「ところで……。さっき『どかあんっ！』って言ったのはなんでだ？」

「いったい何がどうしてあんな事態に？」

「なんでってそりゃあ」

騒ぎを引き起こした左側のアホが当然という顔でこう言った。

「リンボアのバーが落ちたから、その音を表現しただけだよお」  
あれがバーの落ちた音か？普通に『ガタンツ』と言えはいいんじゃないか。

「あんなに大声を出す必要があつたのか？」

うう、まだ耳の奥がおかしい。

「ん？だつて今日のスローガンだから」

「スローガン？」

「そ。 “ 何事もダイナミックに ” と言つのが今日のスローガン」  
ダイナミック過ぎだろう……。

更に二時間、クリーナーを作動させることにした。

## 6【イツツアビューティフルネーム

奴等の名前のことで話をしようとしていただけなのに、核心に触れることもなく、奴等による脱線に次ぐ脱線ですでに七時間ほど経過していた。

あの大声のせいもあるが、精神的な疲れでどうも頭がふらふらする。

すつきりするためにも、俺はシャワーを浴びてさっぱりすることにした。

「おい、ちっちゃい人達」

テーブルの上でじゃんけんをしている二体に声をかける。

「なあに？」

「なあに？」

「俺は風呂に入ってくるから、そこで大人しくしている」

「ここで？」

「そうだ。テーブルの上から降りたり、大きな声を出したりしたら、またクリーナーで吸い込むからな」

「わ、わかったよお」

「ここでおとなしくしているよお」

二体とも顔を青くしてブルブル震えている。

「よし。絶対だぞ」

そうやって俺はリビングを後にして、風呂場に向かった。

脱衣所で着替えていると、リビングにいる奴等の声が届いた。

「今度はしりとりしよう」

「そうしよう」

よしよし、そうやって大人しく遊んでいるよ。

石鹸が切れていたことを思い出し、洗面所の下戸棚に買い置き

しておいたはずの石鹸を探していると、しりとりが始まった。

「飴」

「めだか」

「かめ」

「メガネ」

「ねこ」

「こま」

「的」

アホ共にしてはまともに遊んでいる。

「トツプアスリート」

「トレンチコート」

「東京都」

「トムキャット」

「トレンドスポット」

「トーストセット」

おっ。なかなかやるなあ。

感心しつつ奴等のやり取りに耳を傾けていると、案の定、おかしな方向に進みだした。

「と、と、と……。隣りの猫の鼻にからしを塗りたくる生徒」

とうとう“と”で始まる言葉のネタが尽きたらしく、単語が文章になっている。もう、何でも有りだ。

「トントン拍子に前科四十六犯になった原田まさと」

トントン拍子の使い方が間違ってます。……それより、原田まさとって誰？

馬鹿馬鹿しい展開だが、続きが気になる。

俺は着替えの手を止めて、ひそかに耳を澄ましていた。

「時々間違えてプルトニウム飲んじゃう原田まさと」

そんな物騒な物、何と間違えんだよっ?!

「東京都庁で千葉の名産品を売る原田まさと」

売れるのか？

「豆腐の角で頭をぶつけて頭蓋骨陥没した原田まさと」

骨、弱すぎ……。

「東海道五十三次を順番に言っていたら五十八次になっていた原田まさと」

なんで増える？

「トレンディ俳優になりたい八十七歳の原田まさと」

そんなに高年齢の方だったの？！それにしても良識無さ過ぎでは……。

奇天烈爺さんの原田まさと氏についての疑念が猛烈な勢いで渦を巻いていたが、埒が明きそうにないのでとっと風呂に入ることにした。

「ふうう、これで少しは落ち着いたよ……」

タオルで頭を拭きながら、リビングに戻ってくる。

「どうやら奴等はきちんと言いつけを守っていたらしいな」

部屋の中は散らかっていないし、風呂に入っている間に大きな物音もしなかった。

「ん？」

俺はテーブルの上でうつぶせに寝っころがっているアホ共に視線を落とす　　いつの間にやらサングラス着用。

「……なんで横になつてんだ？」

眠くなったにはおかしい。サングラスなど必要あるまい。

俺の質問にアホ共が楽しそうに答えてくれた。

「日光浴してるのぉ」

「エア―日焼けね」

またしても無意味なエア―炸裂中。

俺の頭痛再来……。

ま、まあ、約束通り大人しくしていたから、これ以上突っ

込むことは止めよう。

つかの間の落ち着いた時間は駆け足で走り去り、俺はソファーにどざりと身を投げ出した

このまままんじりともなく時間を過ごしていたが、奴等の名前についてのことを思い出した　　なんかもう、どうでもいい気にもなってきたが……。

「おい、ちっちゃい人」

「なに？」

「なに？」

このように『ちっちゃい人』と呼ぶと、二体が返事をするのでややこしい。

それぞれ個体の名前は無いのか？

「なあ、お互いになんて呼んでいるんだ？」

「おい」とか

「お前」とか

「ちび」とか

お前もな。

「ハゲ」とか

お前もだつて……。

「つまり、“ちっちゃい人”という以外の名前は無いんだな？」

「うん」

「そうだよお」

「よし、じゃあ俺が名前をつけてやる……ん？何だ、その嫌そうな顔は」

思いつきりしかめ面をしている二体。

「失礼な奴だな。俺は結構センスいいんだぞ」

奴等は声を出さないものの、口の形が『ええ〜』と嫌そうになっているのが分かった。

「俺がつけてやる」



今度は口の形は先程度同じままで、更に眉を寄せてかなり不満そうな顔。

俺は卓上用クリーナーに手を伸ばした。

「……俺がつけてやる」

すると首がもげんばかりの勢いでブンブンとうなずく二体。

「はいっ、わかりましたあ」

「よろしく願いますっ」

と、俺の申し出を快く了解した。(……快く?)

「うん、そうだなあ」

テーブルの上でおとなしく正座をし、こちらの様子と卓上用クリーナーの動きを伺っている二体。

そういえば、こいつ等っていつも横に並んでいるよなあ。

お。名案がひらめいた

「ようし、お前達の名前が決まったぞ」

「わ、わあい……」

「ははは、楽しみだなあ……」

表情が暗く、セリフの内容と様子が合っていない。

俺はクリーナーのスイッチを入れた。

ブウウン……と低くうなるクリーナー。

とたんに、その場でびよこん、びよこんと飛び跳ねて、両手を拳げて大喜びする。

「わあい、わあい。やったね」

「すっごく楽しい。わくわくするう」

……わざとらしい。

ちょっとムカツと来たので、奴等のケツを吸い込んでやった。

「ね、ねえ。ちっちゃい人たちの名前はあ?」

「決まったんでしょあ」

お尻のあたりをさすりながら、聞いてくる。

「ああ、そうだよ」

俺は自分に向かって右側にいる奴に向かって、

「お前は“ちっちゃい人 右”」

そして、左側にいる奴に向かって、

「お前が“ちっちゃい人 左”だ」

と言った。

「右とお」

「左い？」

そろって首をかしげている。

「分かりやすいだろ。名付けてやった俺に感謝しろよ」

とは言いつつも、実際俺には見分けが付かない。

別にいつかぁ。「右」と呼んで返事したほうが、右ってこ

とで……。

「うん、わかったあ」

「ありがとうねえ」

こうしてやつらの名前に関する件は、ようやく決着をつけることが出来た。

## 6【イッツ ア ビューティフル ネーム(後書き)】

日本全国の「原田まさ」と様。勝手に名前を使ってごめんなさい。ふと思いついたのがこの名前だったんです。

## 7 偉大なる俺様の名前（前編）

便宜上『適当に』つけた名前だが、こちらが呼べばきちんと返事をするので、奴等にとってはどう呼ばれるかは大して重要ではないらしい。

「じゃあさ、じゃあさ」

「ちっちゃい人たちは何て呼べばいいのお？」

「呼ぶ？」

二体が俺のことを指差す。

「ああ、そうかあ」

自分が『こいつ等をどう呼ぶか』ということばかりが頭にあって、自分がどう呼ばれるか』ということにはまるで頭が回らなかった。

『中原さん』にしても『カズヤさん』にしても変な感じだなあ。

なかなかいい案が浮かばない。

俺はこいつ等を友達としてみるつもりは毛頭無いので、あまり親しげなのは受け入れたくない。断固お断りである。

「どう呼ばせようかなあ」

『ご主人様』というのは変だし。さて、どうしよう。

「ん〜、どうしようかなあ」

ソファアの背にもたれ、腕を組みつつ思案する。すると奴等が目をきらきら輝かせる。

「はあい。だったら、俺たちがつけてあげるう」

右が勢いよく挙手をする。

「いい呼び方、考えてあげるう」

左もつられて挙手をする。

「謹んで辞退申し上げます」

速攻で断った。

「え〜」

「なんでだよお」

頬を膨らませてぶーぶー文句を言うアホ共。

「何でつて……。お前らのセンスは当てにならないからだ」  
「ずばり言っちゃった。」

こいつ等にまかせたら、間違いなくおかしいことになるはずだ。

「ひどい。俺たちも一生懸命考えたら、いいアイデアが出るの  
い」

信用できるか。

「そつだよお。試しに俺たちに任せてみなよお」

絶対に嫌だね。

「結構です。丁重にお断りします」

断固拒否の姿勢を貫く俺。

「ちええ〜。つまんないのお」

「じゃあ、いいよ。これから二人で遊ぼう、右」

「分かったよ、左」

テーブルの上からぴよこんと飛び降りる二体。

「何して遊ぶんだよ？ 暴れたり、大きな声を出すなよ」

今朝のような騒ぎはもう勘弁してほしいものだ。

「そんなことしないよお」

そつ言つと右は背中に背負っていたリュックから小さなリモコンを取り出した。

「うん。しない、しない。ちょっとボタンを押すだけえ」

左も同じようにリモコンを取り出す。

「ボタン？」

何だ、そのリモコン？

「そ、ボタン」

右と左がそろってにつこりする。

「押すとどうなるんだ？」

俺の背中がにわかに粟立つ  
嫌な予感がするのは気のせい  
だろうか……。

「一個押して見せてあげるよお」

「秋にぴったりの遊びねえ」

右が持っている沢山ボタンが並ぶリモコンのボタンを一つ押した。

そして俺は自分の予感が正しかったことを実感するのだった。

ズウウウウンツツツ……。

地響きがして、アパートが小刻みに揺れる。

「……な、なんだ？」

しばらくして、パトカーや、救急車、消防車のサイレンが付近一帯に鳴り響く。

「なにが起きたんだっ?!」

サンダルを引つ掛け、慌てて外に飛び出す。

すると百メートルほど離れたところにある空き地上空に見事なきのこ雲が立ち昇っていた。

穏やかな秋の晴天の中、青い空と見事なコントラストを醸し出している白いきのこ雲……。

「げっ……」

俺、絶句。

その足元でぴよんぴよん飛び跳ねてはしゃぐアホ共。

「大成功ねえ」

「やったねえ」

なんて事をしでかしてくれたんだよ、お前ら。

「……もしかしなくても、あれ、お前達の仕業か？」

そして返ってくるのは予想を裏切らない返事。

「そつだよお」

右はビシツとVサイン。

「秋にはやっぱり“きのこ雲”ねえ」

腕を組んでうん、うんとうなずく左。

“きのこ”ならそつだろつけど、“きのこ雲”は季節関係ねえ！！どの季節でもだめだろつ！！

「お、おい。ボタンはあといくつあるんだ？」

俺の額と背中は嫌な汗でぐっしょりだ。

「ん〜、えとねえ。一個使ったから、あと二十四個あるよお」

リモコンを俺に見せてくれる。

今押したところは赤いランプが点滅しており、未点滅のボタンがずらりと並んでいる。

「二十四……？」

ゴクン、と息を飲む俺。

一つのリモコンで二十五個もきのこ雲が発生するのであれば……。それはかなりまずい事態である。

「リモコンのボタンはまだまだいっぱいあるからねえ。いくらでもきのこ雲作れるよお」

左のリモコンはすべてが未点滅。

つまりあと四十九個もボタンがあるということだ。

このままではこの付近が……、いや、日本全土が穴だらけになる。俺の顔は誰が見ても真っ青であったことだろつ。

「あ、あのさあ、やっぱりお前達に呼び名を付けてもらおっかなあ、なんて……。あは、はははははは」

「え〜」

「やだ」

右と左が顔をしかめる。

「お願いします。付けてください」

日本の安全が俺の呼び名くらいで救われるなら、喜んで犠牲になろつ。

俺は土下座して奴等に頼み込むのだった。



## 8】偉大なる俺様の名前（後編）

アパートの外はいまだに警察官やら、消防隊員やら、野次馬やらでごった返している。

「はああ、まったく。なんてことだよ……」

結局奴等の遊びは大騒ぎを引き起こすことになることが痛いほど分かった。

「うかつな事言えねえなあ」

気持ちを落ち着かせるためにソファーに深く腰をかけ、大好物のカフェオレを口にする。ミルクのまるやかさとコーヒーの香りが同時に楽しめるので、飲む機会が多い。

今日はいつもより砂糖を多めにしている。

「精神どころか、脳みそまでぐったりだよ……」

甘ったるいカフェオレが今の俺にはちょうど良い。気休めではあるが、幾分俺の気持ちが落ち着いてきた。空き地付近の騒ぎはまだ収まりそうに無いけれど……。

足を投げ出し、背にもたれながらテーブルの上で作業中の右と左に目をやる。

名刺ほどの大きさのメモ用紙に貸してやった鉛筆で呼び名の候補を書き込みしており、奴等の近くには相当数のメモが散乱している。身体の高さに比べれば人間のオレが使う鉛筆は大きすぎて使いにくいと思うのだが、両手でうまく抱え込み、意外なことに器用に使いこなしている。

それにしても、一体いくつ書き出すつもりなのだろうか。

「これって結構良い線行つてると思うんだけどお」

右が今しがた書き込んだメモを左に見せている。

「ん、なんて言うか、インパクトが無いよねえ」

たかだか呼び名にインパクトは必要ないと思うのだが、ここで口

を挟むとややこしくなりそうなので、作業が終わるまで大人しく見守ることにした。

奴等の作業が始まっておよそ四十分。ようやくお互いが候補の書き出しを終えたらしい。

今度はメモを見ながらあれこれ話し合っている。

どうやらランキングをつけて、順に発表するようだ。

二体でああでもない、こうでもないと言いながら、メモを順番に並べ替える。

並べ替え作業は十分ほど終わり、笑顔で俺に振り向いた。

「頑張つていっぱい考えたんだよお」

「一応ちっちゃい人たちで順位をつけたんだあ。これから順番に発表するねえ」

「ほう、楽しみだな」

無表情で言い放つ　　本当に楽しみにしているはずが無い。

「もう、もっと楽しそうにしてよお」

「これじゃ俺たちもつまんない」

鉛筆を振り回す二体。

「あつ、悪かった。俺のために一生懸命頑張ったんだよな。いやあ、楽しみだなあ。うん、楽しみ、楽しみ」

急いで無理矢理に笑顔を作る俺。気が変わった奴等がまた爆弾のリモコンを持ち出しては困る！

「うん、きつと気に入ると思うよお」

「じゃあ、発表するねえ」

とたんにご機嫌になる奴等。単純だけど、面倒だ。

「こほん」

右が咳払いをする。

「こほ……ん、こほつ。げほつ、げほつ……。げっほ、こほつ……。つげえええ……」

咳払いの途中で無意味に息継ぎをした左が、苦しそうにむせてい

る。

大丈夫か、左？

「では発表します！」

さっさと次に進む右。意外と薄情な奴だと判明。

左は涙を拭き拭き、進行に加わった。俺の方に向いて、メモはただ見せないように後ろ手に持っている。

「じゃじゃん まずは二百七十六位の発表です」

やめれ。一位の発表までに一日が終わってしまう。

「あの……。もう少し上位からの発表にならないかなあ」  
奴等の機嫌を損ねないように、恐る恐る申し出た。

「えー」

「しかたないなあ」

ぶつぶつ言いながらも枚数を減らしてくれた。

右と左がメモの並べ替えをする。

「それなら二百五十九位から」

大して変わつたらん。

「もっと上位から……。出来ればベスト5からになりませんか？」

「なんでえ。せつかくいつぱい考えたのにい」

「無駄になつちゃうよお」

「あ、いや……。時間があるときに他のアイデアは見るから、とりあえずは選りすぐりの物を……」

文句を言いつつも枚数を減らし、彼らの手には数えるほどの数枚のメモ。

「じゃあ、六位からの発表です」

ま、まあ、一つくらいは多くてもいいかあ。

「誰もが知っているビッケネームをちよつと拝借」

左は持っていた二つ折りのメモをばつと広げる。

『カノウ兄弟』

例のセレブ姉妹のパクリだ。

「ごめんなあ。俺、巨乳じゃないから……」。

奴等のアイデアは俺の予想をはるかに超える意味不明なもの  
しい。

六位でこれなのだ。一位はどうなっていることやら……。  
俺の反応をよそに、発表は進んでゆく。

「続いて第五位の発表です。中原の“原”の字を取って……」  
左の持つ広げられたメモに書かれていたのは

『原田まさと』

もう別人の名前じゃん。それに『原田まさと』は俺の中で  
は不審人物リストのトップだから、嫌だ！

「では第四位。カズヤのズの『 』を取って……」

そんなピンポイント突かれても。

『ごがべば』

濁音ばかりで耳障りだ。

「第三位はちっちゃい人たちの憧れをすべて詰め込んだ……」

『アデ ランス・プロ ア・リー 21世』

やっぱり頭髮二本じゃ淋しかったんだな。

「第二位です。親しみの中にも洗練された大人の気品を込めて……」  
能書きは立派だ。

『セレブ カズびよん』

お前らの気品はその程度か。セレブつければ良いってもん  
じゃねえよ。

「そしてちっちゃい人たちの持てる限りの知能とアイデアを集結し、  
斬新かつシンプルな栄えある第一位は……」

おっ。ちよつとは期待できそうだぞ。

ぱっと広げられたメモの中央に書かれたその言葉とは……。

『ま。』

どつやって読むの〜？

「ねえねえ、どれがいい？」

「好きな選んでいいよお」

選べねえ。

「あの、大変申し訳ないのですが……。このほかにまともな作品はないですかね？」

「みんなまともでしょ」

「まともにも面白いでしょ」

芸人ではないので、俺には笑いもインパクトも必要ない。

「もっと呼びやすくして、分かりやすいのがいいなあ」

「そうなの？」

「それじゃあ」

二体が頭を突き合わせてしばし話し合う。

そして声を揃えて言った。

「おとうさん」

「……それでいいです」

こんなアホ共を子供に持った覚えは無いけれど……。



## 9】おしゃれとは

「なんか腹減ったなあ。……あ、もうこんな時間か」

時計を見ると、時刻はすでに正午を回っている。

起きてから、うだうだしていただけの割には空腹だ

まあ、

精神的には相当やられたからな。

「冷蔵庫に大した食材入ってないし、買い物にでも行くか」

ソファから立ち上がり、クローゼットに向かう。

案の定、アホ共もついてくる。

「ねえ、ねえ。おとうさん」

「なにをするのあ？」

なぜか俺の足をグルグル走り回っている二体      そんなに

回っているとバターになるぞ（『チビ黒サンボ』参照）。

「もう少し離れるよ。歩きづらい」

言われても奴等は一向に距離を取らない。

「なんか楽しくなってきたあ」

「おもしろい」

「そうかよ……」

つたく、邪魔なんだよなあ。

「おっと」

俺はわざとよろけて、奴等を踏んづけた。

「ぐしゃ！」

「どかつ！」

踏まれた効果音じゃなくて、ここは悲鳴だろう……。

「うっ〜」

「おとうさん、ひどい」

「だから離れると言っただろ。それに従わないお前らが悪い」

体を擦りながら恨めしそうに見てくる奴等。

もちろん俺は相手になんかしない。

部屋着から外出着に着替える。

そういえば、こいつ等って何着ているんだ？

着替えの手を止め、足元で伸びているアホ共を触る。  
意外とざらりとした感触。

「お前達って、服、着ているのか？」

お腹や背中を丹念に触る。これまでに触ったことのない生地だ。

「うふふふ。おとうさん、眠たい」

「くふふふ。おとうさん、ムエタイ」

「はあ？」

なんだ、『眠たい』と『ムエタイ』って……。

「もしかして、“くすぐりたい”って言いたいのか……？」

「あ、それぞれ」

「くすぐりたい」だ

『たい』しか合ってないぞ。相変わらず、言葉の認識がお粗末な  
奴等だ。

「お前らの服って何で出来ているんだ？」

薄くつまんで引っ張ってみる。

奴等が着ている全身タイツはものすごく伸縮性に富み、同時に丈  
夫さも兼ね備えているようだ。どれだけ引っ張ってもひたすら伸び  
るだけで破れる心配がない。

「そういえば、幼稚園の頃習った歌の“鬼のパンツ”みたいだな」

鬼のパンツはいいパンツ　強いぞ　強いぞ　強いぞ

百年経っても破れない　強いぞ　強いぞ

余談だが、百年も身に付けていればさぞ臭いだろうと幼稚園生な  
がらに思っていたのだが、同じパンツをはき続けているということ  
はないだろうと後に気がついた。



夜に洗濯をし、乾いたものを翌日身に付けていたのかもしれない  
　　ってことは、鬼は夜ノーパン?! (スペアぐらいあるでし  
　　ように……)

話を元に戻そう。

俺は擦る手を止めた。

「ちっちゃい人星人はみんなこのタイツなのか？」

「うん」

「そうだよお」

その場にちよこんと正座して、受け答えするアホ共。

「この繊維、何で出来ているんだ？」

今までこんな素材は見たこともない。

「ええ」

「知らな〜い」

聞いた俺が馬鹿でした。

「服ってこれしかないのか？」

「馬鹿にしないでよね！」

「他にもあるんだから！」

向こうに置いてあるリュックを取ってきた。

そしてリュックからなにやら取り出し、『ごそごそと身に付ける。

「じゃあ〜ん」

「じゃじゃ〜ん」

蝶ネクタイ……だけ？

「俺たちの一番のおしゃれ着ね」

「かっこいいでしょう？」

蝶ネクタイは身に付けるものであって、『おしゃれ着』には入ら  
ない。

「他には？ほら、上に着るものとか……」

普通は白いYシャツに、黒のスラックス、ジャケット、あればカ

マーベルトを着用するものだが。

「ん？」

「ネクタイだけで十分でしょ」

「そ、そうかあ？」

充分なはずはない。

同じ格好を人間がしたら、速攻で留置所、もしくは精神病院行き  
だろう

「いいんだよお、別に服装なんて」

「そうそう。男は見かけじゃなくてハートで勝負ね」  
いきなり初戦敗退しそうな勝負である。

【9】おしゃねとは（後書き）

他サイトになりますが、携帯恋愛小説書きました。もしよろしければごらんになってください。

## 10】大好物（1）

蝶ネクタイを身につけて浮かれているアホどもを放っておき、俺はさっさと外出着に着替える。

近場のスーパーに出かけるだけなので、パーカーにジーンズというラフな格好で十分だろう。

ラフとはいえ、それなりに色使いや流行に気を遣っているから、普段着でもかなりおしゃれな部類に入る。

そんな俺を見上げて、ちっちゃい人たちは思いつきり眉をしかめていた。

「なんだよ？」

俺を見ながらグルグルと回り、その都度ため息をついている。

「だから、何なんだよ？言いたいことがあるなら、はっきり言え」  
パーカーの裾を直しながら尋ねると、不機嫌丸出しでアホどもが口を開く。

「おとうさん！本気でその服装で出かけるの?!」

「全然センスないね！」

両腕を振り回し、やたらとプリプリしているアホども。

服のセンスについて、お前らが口出しするな!!

カチンと来たが、念のために自分の格好を鏡で見してみる。

しかし、こいつらに文句を言われるような箇所は何一つない。

「この格好のどこが悪い。おかしな所なんてないじゃないか」

俺が言うと、アホどもは腕組みし、クソ真面目な顔でこう言った。

「おかしいって言うか、インパクトが足りないね」

「そうそう。その程度じゃ、原田まさとに笑われるよ」

っていうか、さっきからちよいちよい出てくるその原田まさ  
とって誰なんだよ？

「ああ、そうかよ。頭のおかしな原田まさとに笑われたって、痛くも痒くもないさ」

アホどもを残し、玄関へと向かう。

するとふてくされた顔をして、二人が慌ててついてくる。

「じゃ、せめてコレ着けなよ」

「きつと似合うよ」

ちっちゃい人たちが差し出してきたのは……、蝶ネクタイだった。

「いらねえよ!」

奴らが俺に渡そうとした蝶ネクタイを奪い取り、下駄箱の横においてあるゴミ箱に叩きこむ。

「この服装に蝶ネクタイつけるほうが、よっぽど笑い者になるんだよ!」

「……でも、原田まさとには勝てるし」

「判定で1ポイント差だけど、勝ちも勝ちだし」

どんな勝負だ?

「うるさい!あんまりしつこく言っていると、お前らをゴミ箱に突っ込むぞ!」

ギロリ、と睨みつけると、アホどもはしぶしぶ黙り込んだ。

「いいか?俺がいない間にちよつとでも騒ぎを起こしたら、24時間クリーナーの刑だからな」

しつこいほど念を押すと、奴らはコクコクと頷き返す。

「わかってるよお」

「大人しく留守番してるからあ」

巨大な不安は残るものの空腹には勝てない俺は、奴らを残して買い物へと出かけた。

俺が住むアパートから歩いて10分ほどのところに、スーパーがある。

食品はもちろん、日用雑貨も揃うそこそこデカイこのスーパーには、引越してきて以来ずっと世話になっている。

今日も顔なじみの店員と他愛もない話をしながら、食料を手持ちのカゴに入れていた。

「ところで、あいつらは何を食うんだ？」

チュッパチャップスを食べるところを見ると、人間の食べ物も普通に摂取可能なだろう。

精神的ダメージを食らっている俺からすれば、あいつらに食料を与えるのはどうにも納得がいかない。

だが、空腹のあまりあのアホどもが暴れだす方が困るのだ。

常識をこよなく愛する善良な市民である俺は、警察のお世話になどなりたくない。

「仕方ない……。あいつらの分も適当に買って帰るか」

俺はレジに向かいかけていた体をくるりと回転させ、再び店内へと戻っていった。

「ただいま」

玄関の扉を開け、ドサリと買い物袋を上がり口に置くと、部屋の奥からアホどもが走ってきた。

「お父さんだあ」

「お帰りー」

そして、真っ先に買い物袋に飛びつく。

「ねえ、ねえ。何買ってきたの？」

「ちっちゃい人たちの分もある？」

がさがさと音を立て、奴らが袋の中身を漁りだした。

「ちゃんとお前たちの分もあるから！」

俺がそう言っても、袋の中であれこれ物色しているアホどもはなかなか出てこない。

「おにぎりがある。でも、きらいー」

「大福だ。コレもきらいー」

ぽいつ。

ぽいつ。

袋の中からおにぎりや大福が飛び出してくる。

「おい、食べ物も投げるな！」

俺が声をかけても、奴らの暴投は止まらない。

「プリンなんて気持ち悪いよねえ」

「ヨーグルトなんて、もつと気持ち悪いよお」

「お父さんって服のセンスも無いけど、食べ物をチヨイスするセンスもないよねえ」

「ホント、ホント。ちっちゃい人たちが買い物について行ってあげればよかったねえ」

アホどもが嫌いだと言っているものは俺が自分のために買ってきた食糧なのに、どうしてこいつらに悪く言われなければならないのか。

収まっていた怒りが再びぐつぐつと湧き上がる。

「うるせえ！俺の買い物にケチつけるな！お前らにはクッキーを買ってきたけど、どうせ文句つけるだろうからやらねえー！」

俺は袋の中にいたアホどもを鷲掴みにし、怒りのままに壁に投げつけた。

「ぐはぁっ」

「ひぶうっ」

例のごとく怪しげなうめき声を上げて、アホどもが伸びている。

「お父さん、ひどい……」

「正直に言っただけなのに……」

「黙れっ！！」

今度は容赦なくアホどもを踏み潰した。

「月に代わって！！」

「オシオキよ！！」

どんなうめき声だ！？

あまりの意味不明さに怒りは成りを潜め、俺はアホどもを残したままリビングへと向かった。



## 10】大好物(1)(後書き)

訳あって、数年ぶりの更新です。近々抹消しようと思っていたのに、某死神の策略にはまり、しぶしぶながらの更新です(苦笑)

## 11】大好物(2)

買い物袋とアホ共が投げ出した食い物を手に、俺はリビングへと向かった。

荷物をローテーブルに載せ、ソファーに腰を下ろす。

「あーあ。おにぎりも大福も潰れてるじゃねえか」

勢いよく袋から飛び出したため、形がかなりいびつになっていた。大福に到っては餅皮が破れて、アンコが少しはみ出している。

プリンやヨーグルトは蓋こそ閉まっているものの、中でグチャグチャになっているだろう。

「まったたく……。この先また食い物投げたら、お前等をこの大福みたいに潰すからな！」

テーブルの上で正座してしおらしく反省しているアホ共を睨みつけると、シヨンボリと肩を落とした。

「分かったよお」

「もう投げないよお」

「本当だな？二度とするなよ！」

もう一睨みすると、奴等はしばらく考え込んだ後、ガバツと立ち上がる。

「……って言うか、変なものを買ってきたお父さんが悪いんじゃないのー？」

「そつだ！悪いのはお父さんだ！ちっちゃい人達は悪くないね！」

さつきまでのしよげていた様子とは一転し、テーブルの上で拳を振り回して逆ギレし始める。

「お父さんが悪い!」

「お父さんが反省して!」

「お父さんは服選びのセンス悪いし!」

「買い物も下手だし!」

「こんな調子じゃ、来月の原田まさとのタイトルマッチに勝てないよ!」

「せっかく武道館を貸し切って開催されるのに、このままじゃお父さん負けるね!」

ちよつと待て。

何だ、そのタイトルマッチってのは。

原田まさとと何のタイトルを賭けて、俺は戦わなければならないんだ?

しかも、わざわざ武道館で。

その事も気になるが、そもそも『原田まさと』とは何者なのだ!?  
いい加減はつきりさせたい。

「おい……」

テーブルの上でぶんむくれているアホ共に声をかける。

するとチラリとこちらを見ただけで、すぐにそっぽを向いてしまった。

「何ですか？」

「今、忙しいんですけど？」

嘘付け。

何もしてないくせに。

「ハイハイ。その忙しい所を申し訳ないが、“原田まさと”について、そろそろ教えてもらえないか？」

俺が尋ねると、奴等は驚きに目を開く。

「お父さん。原田まさとを知らないの？」

「知らない」

「本当に知らないの？」

「本当に知らないんだって」

そう答えると、奴等がぐっくりと肩を落とし、大きなため息をついた。

「これじゃダメだね……………」

「お父さんの将来、真っ暗だね……………」

「は？」

原田まさとって、俺の未来に関わってくるほど重要人物なの

か?!

ますます気になる。

「そんなに言うなら説明してくれよ」

「え〜」

「どうしようかなあ〜」

「どうもしねえよ! 教えるよ!」

生意気にも渋っている奴等の頭をグツと一握り。

「ハーゲン!」

「ダッツ!」

だから、何なんだ? このうめき声は……。

脱力しながらも再度尋ねる。

「で? 原田まさとってのは?」

頭をさすりながら右が言う。

「……敵」

「敵? 誰の?」

今度は左が口を開く。「……お父さんの」

「俺の?!」

大きく頷くアホ共。

「マジで！？本当に俺の敵なのか?!」

更に大きくアホ共が頷く。

「ちょ、ちょっと待てよ！俺は人から敵対心を持たれるような生き方はしてないぞ！！その“原田まさと”について、詳しく教えろっ」

得体の知れない人物に狙われ、俺は軽くパニックに陥る。

そんな俺を見て気の毒に思ったのか　いや、単に何も考えていないだけだろう　奴等が素直に返事をした。

「いいけど」

「ちょっと待ってて」

奴等は自前のリュックの中から、小さい小さいメモ帳を取り出した。

「何だそれ？」

「ちつちやい人メモね」

「秘密情報満載ね」

やたら得意気な顔だ。

「へえ。俺にも見せるよ」

手を伸ばすと、パツと後ろに隠しやがった。

「ダメ！」

「ヤダ！」

「もったいつけるなよ。どうせロクでもない事しか書いてないんだろ」

「そんな事ないもん！」 「重要な事はかりだもん！」  
必死にそのノートを背中に隠すアホ共。

「だったらその重要な情報ってヤツを一つ言ってみる。俺が驚くような情報なら、そのメモを信用してやるよ」

「いいよ！」

「最近とっておきの情報を仕入れたんだから！」

アホ共がパラパラとメモをめくり始める。

半分ほどめくったあたりに超リアルな武 鉄矢の似顔絵を見かけたが、今は追求するまい。

右と左が顔を見合わせる。

「これにする？」

「そうだね」

「何でもいいから、早くしろよ」

「もう、急かさないでよ」

「せっかちな男は嫌いよ」

何でそんなオカマ口調に？

何度目かも分からない脱力感に襲われた。

それから間もなくして、ゴチャゴチャと書き込まれたあるページを開き、奴等はおもむろに口を開いた。

「銀行××支店。普通口座8733125」

「暗証番号は6974。残高55万2068円」

ガタンッ！！

俺はソファーから転げ落ちた。

「そ、それ、俺の口座番号じゃねえか！しかも暗証番号まで?!」

なんでコイツ等が知ってるんだ!?

ちっちゃい人メモ、悔りがたし……。



### 13】大好物(3)

なんだか胡散臭い感じは拭えないが、どうやらちっちゃい人メモはそれなりに確実な情報を握っているらしい。

とりあえず俺の口座番号と暗証番号が書かれていたページは速攻で破り捨てた。

気色悪いので、リアル武 鉄矢の似顔絵も破り捨てる。

「ったく。こんな情報をどこから仕入れてきたんだか」

破ったメモを更に細かくちぎり、ゴミ箱に入れながら呟いた。

するとアホどもが何気ない顔で答えてくる。

「情報はアレから仕入れたよ」

「アレ？」

奴らが指差したのは俺が普段から使っているノートパソコン。

「パソコンには俺の口座番号とか入れてないけど……」

「違うよ」

「銀行のデータを読んだだけだよ」

「は？」

銀行のデータってなんだ？

首をかしげている俺の前で奴らはパソコンを立ち上げ、ちっちゃ

い手でキーボードを叩き始めた。

ネットに繋げてさらにキーボードを弄っていると、その画面には『パスワードを入力してください』という文字が。

なんか、すつげえ嫌な予感がするんだけど。

俺のことなど気にも留めずに、奴らは慣れた手つきでカチャカチャとアルファベットと数字を打ち込む。

そして。

バン、と画面に出てきたのは 銀行××支店の顧客データ一覧。

「うおっ!?!」

啞然とする俺の目に顧客達の口座番号、暗証番号、そして現在の預金残高が次々に飛び込んでくる。

これって、流出させたら相当マズイ情報だよな!?

俺は急いでパソコンの電源を落とし、奴らを掴んで壁に叩きつけた。

「ハッピー!」

「バースデー!」

誰の誕生日?!

毎度のおかしなうめき声に一瞬突っ込みたくなかったが、それ所ではない。

「お前ら、何て事しやがるんだ!!」

「ちょっと、お父さん!!」

「いきなり何すんの!?!」

起き上がったアホ共が大声を上げるが、それ以上の声で怒鳴り返す。

「それはこっちのセリフだ!」

「そんなこと言われても……」

「お父さんが“どこから情報を仕入れたのか”って訊いてきたから……」

「確かにそう言ったが、お前達がやっていることは犯罪なんだぞ!」

「そうなの?」

「でも、簡単にシステムに入れたよ」

「防御ソフトもいまいちだったし」

「パスワードも割と単純だったし」

「『ごちゃごちゃ言っつな!二度とこついうことはするなよ、分かったな!』」

ハンドクリーナーを突き付けて睨みつけると、アホ共は『もうしませんっ』、『ごめんなさいっ』とペコペコ頭を下げた。

俺はソフアーに腰掛け、深いため息をついた。

きのこ雲発生装置は持つてるし、簡単に他所の情報システムに入り込むし、本当にとんでもない奴らだ。

こんな危険な奴等なんかさっさと放り出したいが、それはそれで更に危険な事態になりそうで出来ない。

「はあ……。とりあえず飯でも食うか」

買い物袋の中から食事を取り出し、テーブルに並べる。

形の崩れたおにぎりや大福に続いて、クッキーの箱を置いた。

とたんにアホ共の目が輝く。

「お父さん！それ、クッキー！？」

右が嬉しそうに言う。

「そうだけど」

「本当の本当にクッキー！？」

左も飛び上がらんばかりだ。

「どう見てもクッキーだろ」

クッキー以外の何かに見えるというのであれば、今すぐその役立たずな眼球をえぐり出してやるう。

そう思ったのに、奴等はしっかりクッキーだと認識したらしい。  
……ちっ、残念。

「うわあ、本当にクッキーだあ。久し振りい」

「俺達、クッキー大好きなんだよねえ」

あまりに嬉しそうな顔をするので、素直に渡すことにした。

「その箱ごとお前等にやるから、大人しく食ってる」

「この箱、全部くれるの？」

「ああ。その代わり散らかすなよ」

「うん、分かった」

右と左はクッキーの箱の周りをうるつき始める。

「“卵と牛乳をたっぷり使用”って書いてあるね」

「“北海道産小麦粉を厳選”だって」

箱の上に登ったり、ひっくり返したりして、書かれている文言を  
いちいち読んでいる。

そして表に書かれたある言葉を目にした時、奴等の顔が一段と輝  
いた。

「 齒触りサクサク ” かあ！！ 」

“ アーモンドのカリツとした食感 ” かあ！！ 」

腕を振り回して大喜びだ。

「 サクサク 」

「 カリツ 」

その文字を見つめて恍惚の表情を浮かべるアホ共。

何がそんなに奴等の気を惹くのか分からない。

分かりたいとも思わないので、俺は黙々と自分の食事を進めた。

おにぎりとお福を食べ、お茶を飲んで一息ついても、奴等はまた  
『 サクサクねえ 』 『 カリツねえ 』 と呟いている。

もちろんコイツ等に付き合うつもりは毛頭ない。

手早くゴミをまとめて、一休みするために寝室に向かった。

それから二時間ほど昼寝をした後に、リビングへと戻った。

「 おい。クッキーは美味かったか？ 」

その声をかけようと口を開きかけた俺の目に、開封していない箱の前でいまだに『 サクサク 』 だの『 カリツ 』 だのと言いながらはしゃぐアホ共の姿が写った。

コイツ等、クッキーじゃなくて箱だけあれば満足するんじゃないの！？

昼寝して多少スッキリしたはずなのに、体全体が倦怠感に襲われた俺だった。

14】大好物(4)

何が楽しいのか、飽きもせずクッキーの外箱を眺めてご機嫌なア  
ホ共。

「カリッ  
」

「サクッ  
」

「カリカリッ  
」

「サクサクッ  
」

「カリカリカリッ  
」

「サクサクサクッ  
」

「カリカリカリチヨリッ  
」

ん？チヨリッ？

「サクサクサクピユクッ  
」

ピユクッ??

「カリカリカリチヨリッ、ゴニョ  
」

「サクサクサクピユクッ、シヤデ  
」

奴らがおかしなことになってきた。



「ゴニヨとか、シャデとか、どんな食べ物を表した食感なのだろうか。」

「訳の分からないこと言っていないで、さっさと食べるよ。」

そう声を掛けるも、奴等はまったく聞いていない。

立ち上がり、怪しげな言葉をぶつぶつと呟き続け、とうとうさっきまで熱心に繰り返していた「カリッ」、「サクッ」といったクッキーに関する擬音ではなくなってきてしまった。

「アニヤ、ロノ、テパ！」

「ヌト、キマ、ヤジャ！」

次第に激しく叫びだし、高々と拳を突き上げる。

それから互いに向かい合い、ボクシングのように打ち合いが始まった。

「トイ、セモ、フキ！！」

「ムエ、ナバ、ギレ！！」

掛け声は珍妙なくせに、そのパンチには恐ろしいほどの切れがある。

無駄な才能がある奴等だ。

掛け声のテンションが上がるとともに、パンチのスピードは増してゆく。

少し離れた所に立っている俺のところまで、パンチが風を切る音が届いた。

「お、おい……」

もはやプロのボクサーも驚きの速さで、俺の目には奴等の腕の動きが見えない。

こんな奴等にパンチの切れは必要ないだろうに。  
世の中、不条理である。

「右、そろそろ決めた方がいいよね!」

「そうだね、左。よし、行くぞ〜!」

アホ2匹がクロスカウンターの体勢に入る。

そして、その掛け声は……。

「お父さんのへそくりは—————!!」

「洋服ダンス、下から3段目の引き出しの裏—————!!」

「黙れ—————!!!!!!」

俺の個人情報勝手に大公開 第2段を炸裂させたアホ共を、上から思いっきり踏み潰してやった。

「まったく、何でそういうことを知っているんだよ!?!」

踏まれて伸びているアホ共はどうか腕を伸ばし、“ある物”を指差す。

その先にあるものは、ちっちゃい人メモだった。

「すつげえ怪しいけど、割と正確な情報が書いてあるんだな」  
手を伸ばしてメモを拾おうとすると、奴等が言う。

「勝手に見ないで！」

「プライバシーの侵害だよ！」

「お前等が偉そうに“プライバシー”って言うな……！」

パツと開いたメモ帳に書かれていたのは……。

背筋が寒くなるほど超リアルに描かれた俺の両親の似顔絵だった。

「ふんつつつ！」

一気にそのページを破り取る。

そして、『これでもかっ』というくらいに細かくちぎった。

「ああっ、ひどい！お父さん、やめて……！」

「今世紀最高の傑作なのに……！」

ビッリビリにメモを破いている俺を恨めしそうな目つきで見ているが、かまわず更にちぎり続ける。

本当に何なんだよ。どうして俺の両親の恥話とか顔とか知ってんだよ……？

あらかたちぎってゴミ箱に突っ込むと、少し気分が落ち着いた。

「やれやれ……」

ぐったりとソファーにもたれかかり、改めてちっちゃい人メモを開く。

そこにあつたのは、携帯電話の番号。  
しかも数ページに亘っている。

「こんなにたくさん……。誰の番号なんだ？」

俺がちぎったメモの破片を全て拾い出し、ジグソーパズルとして楽しんでるアホ共が手を止める。（もちろん、そのメモの破片は残らずクリーナーで吸い込んでやった）

「それはねえ」

「A×B48メンバーの番号」

「……は？」

「だあかあらあ、A K×48のメンバーの携帯電話番号なの」

「お父さん、もしかして×KB48が分からないの？時代遅れも甚だしいよ、この原始人」

「嘘だろ……」

呆然とする俺。

しかし、くそ生意気な発言をした左を一発殴ることは忘れない。

「それなら、確かめてみる？」

「この携帯で掛けてみてよ」

俺に殴られて頭の形がかなり歪になっっている左が、いそいそと自分のリュックから携帯電話を取り出した。

あんな小さいリュックに、何倍も大きい携帯電話が入っていると  
は。

国民的漫画の主人公である『ネズミに耳をかじられたシヨックで全身青くなってしまったという、夢があるんだか無いんだか微妙な立ち位置の未来の猫型ロボット』の腹部についているポケットと同じ仕組みだろうか。

もしそうだとしたら、今世紀最大の発明かもしれない。

「……そのリュック、4次元に繋がっているのか？」

ゴクリと息を呑み、恐る恐る尋ねる。

すると奴等は至って平静な顔でこう言った。

「違うよ」

「異次元だよ」

4次元より遥かにヤバイ気がするの、これ以上深く追求することは止めた。

「ちっちゃい人メモは正確な情報しか載せてないんだよ」

「信じられないなら、早く確かめてみてよ。……携帯電話の使い方が分からないから、確かめられないのかな？ やっぱ、原始人なんだね」

押し付けられるように渡された携帯電話を左手で受け取り、右手で左の頭を握りつぶす。

「この携帯を使うのか？」

「うん、この携帯じゃないと駄目なんだよ」

「他の電話じゃ、メンバーが安心して出てくれないから」

左の頭はもはや原形をとどめていない。

アンパ○マンであれば、ジャ○おじさんに泣きついて新しい顔を作ってもらわなければならないほど、かなりの勢いでグチャグチャだ。

しかし、左は割りと平気そうである。……平気そうだから、このまま放っておこう。

ものすごい胡散臭さを感じながら、とりあえずは掛けてみることに。

番号を押し、2コールで相手が出た。

『ア×モトさん、お疲れ様です』

耳元から近年ラジオやテレビでよく聞く声が。

これって……、これって、もしかして？

「前田……○子？」

『そうですよお。やだなあ、アキ×トさん。電話を掛ける先を確かめなかつたんですか？』

無邪気な声が返ってくる中、速攻で終話ボタンを押した。

「ね、ね。お父さん、どうだった？」

「ちゃんとメンバーに掛かったでしょ？」

嬉しそうに訊いてくるアホ共。  
俺は血の気が引いて、例の猫型ロボットに負けないほど真っ青になる。

「は、はは……。偶然だよ、偶然。あはは、はは……」

頬を引きつらせながら、念のために他の番号を掛けてみる。  
今度は1コールで繋がった。

『お疲れ様です、アキモxさん。こんな時間に掛けてくるなんて、珍しいですね』

大島○子——！？

これまた速攻で電話を切る。

「な、な、なんで！？何でメンバーに繋がるんだ？？」

「さっき、ちっちゃい人たちが言ったでしょ」

“メンバーの電話番号だ”って」

さも『大したことではございません』という顔のアホ共。

こんな貴重な情報、彼女たちのファンなら喉から手どころか、太ももが出るほど欲しいだろう。

ここで俺はふと、あることに気がついた。

それにしても、あの2人は電話に出るなりどうして『×キモトさん』って呼び掛けたんだ？

「おい、この携帯電話って……」

「あ、それ？この前、回線をちょっといじったらね」

「アキモト×スシの携帯電話と同じ番号表示がされるようになったやつだの」

笑顔で答える奴等を見て、真っ青どころか真っ白になった。今なら一反木綿に勝てる！！（勝ってどうするつもり？）

「こんな携帯も電話番号も、存在させたらマズイだろ！！」

「マズイどころかオイシイよ」

「お金儲けの良い材料だよ」

反省の色がぜんぜん見えない奴等に膝蹴りを食らわせる。

「秋葉原は！！」

「神の領域！！」

オタク観満載の叫び声をあげて、奴等は蹴り飛ばされた。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8635c/>

---

ちびんちゅ物語

2011年10月9日03時16分発行